第 13 回 7/7

「アーティスト・マネージメントとは？
～サザン・福山雅治から Perfume・佐藤健・三浦春馬まで～」

大里 洋吉（おおさと・ようきち）先生

株式会社アミューズ 最高顧問
兼アミューズ総研“Skhole”代表

総合エンターテイメントプロダクション「アミューズ」の創設者。
青森県出身、立教大学文学部英文学科卒業。
その後、渡辺プロダクションに入社。ザ･ピーナッツ、梓みちよ、キャンディーズ等のマネージャーを務める。
独立後、株式会社アミューズを設立。サザンオールスターズ、福山雅治、ポルノグラフィティ、Perfume、三宅裕司、深津絵里などを育て上げ、さらには舞台や映画制作にも尽力。
代表取締役会長退任後、アクティブシニアをターゲットとする株式会社アミューズエデュテインメントを設立、アミューズミュージアムを東京･浅草にオープンする。

《講義概要》

株式会社アミューズを設立し、数々のアーティストやタレントを育てた株式会社アミューズ最高顧問の大里洋吉氏が、アーティスト・マネージメントについての講義を行った。

講義では、アミューズの紹介 VTR を上映し、大里氏自身の経歴やアミューズの歴史を詳細に説明。同時にマネージメント会社の仕組みや役割について、アーティストの裏話なども交えて具体的に伝え、マネージメントの仕事における「人間力」の重要性についても説いた。

また、その場でしか味わえない空気を共有してその一瞬を記憶に残るものにする「ライブイズム」の精神が、今後のエンタテインメントの展開に欠かせない考え方となることを示した。

さらに、2009 年にオープンしたアミューズミュージアムについても VTR などで紹介し、その設立までの経緯や目的、新しい展示のスタイルについて伝えた。関連して、日本での日本文化の扱われ方や、日本人の学習の姿勢についても指摘。歴史や語学を学ぶ必要性を学生に訴えた。

《受講生の感想》

●「感動だけが人の心を撃ち抜ける」というアミューズの紹介文がとてもいいなと思いました。マネジメントという仕事は、アーティストたちの後ろで支えることがメインだと思っていましたが、「アーティストを引っ張っていくことこそがマネジメントの仕事」ということを知りました。

立命館大学・産業社会学部・2 回生

●マネジメントとは“人間”の力が必要という言葉がすごく心に残りました。また、エンターテイメント１つをやるにしても、本当に勉強は根本的に必要なものだと感じました。自分のやっている勉強は本当に意味があるのかわからなかったけれど、“何のために”勉強するのか、そこを根底に考えていこうと思えました。　立命館大学・産業社会学部・2 回生

●アミューズが今一番力を入れているのがライブであり、「ライブイズム」を大切にしているという話が印象に残りました。技術が進歩すればするほど、人と人との直接の関わりが疎遠になっていくかもしれない。そんなときだからこそライブが重要になってくるという考えは、とても勉強になりました。

立命館大学・法学部・4 回生

●大里先生が掲げている「ライブイズム」という言葉は、ネット文化やデジタル化が進む現代の風潮とは逆行する言葉であるはずなのに、やはり生の感動、反応等がいつの世も最も大事なものであるということを端的に表した言葉だと思います。「ライブイズム」の精神は、何もエンターテイメントの世界だけに通じるだけのものではないと思うので、忘れずにいようと思います。

立命館大学・産業社会学部・1 回生

●イギリスでは美術館が無料であったり、その規模、質は日本のそれを上回り、日本の美術館は“遅れている”感じを得たが、このアミューズミュージアムは今後の美術館のあり方の１つの指標になるような気がした。　立命館大学・産業社会学部・3 回生

●浮世絵は、フランスでジャポニズムを発生させたほど素晴らしいものですが、日本での目立った評価は少ないです。日本人は外の世界の素晴らしいものにばかり目を向け、自分達の持つ素晴らしいものに目を向けていない。教養があるというのは、自分の国の理解、評価がしっかりできていることだと思います。　京都光華女子大学・人間科学部・2 回生